

# 「研究評価」と「論文出版」

福山 秀敏 東京理科大学



アカデミアにおける研究成果は論文として出版・公開され、研究評価は論文の内容に基づく。従って「評価」と「出版」は表裏一体である。努力して到達した新知見を認めてもらい褒められることほど研究者にとって嬉しいことはない。最近ある財団からの援助により新境地を拓いた研究者の『励まされて』という記事を読み、ひたすら「知りたい・理解したい」という気持ち（「curiosity-driven」）をもとに困難に立ち向かう「研究」の持つ魅力と同時にその内容の「評価」の重要性を再認識した。科学技術の展開が国の命運さえも左右しかねないことを反映して「研究振興」に多額の研究資金（多くの場合原資は税金）が用意される昨今では、「研究活動」振興とその成果の「評価」「出版」は国家的重要案件となっている。実際2023年5月に仙台で開催されたG7「科学技術」会議でもオープンアクセスが重要項目として取り上げられている。他方「評価」の実態は大変心もとない。例えば研究評価に関するサンフランシスコ宣言San Francisco Declaration on Research Assessment (DORA)が公表されたのは2015年であるが、我が国の対応は極めて鈍く、「周回遅れ」などと言われている。実際ある研究機関の最近の国際レビュー公開報告書には「Impact factor (IF) and

average citations are no longer international standard.」とまで指摘されている（“average citations”はtop 10%, 1%等）。IFは雑誌についての指標であって、個々の論文内容とは直接関係ない。文科省も「IFが誤用されている」と明言している。一方で、国のプロジェクトの「評価」に際して、「成果報告」書に「顕著な業績」と論文が掲載された雑誌のIF情報の記述を求める欄があり、驚いたことがある（IFを口にする評価者は、内容を理解できない、あるいは理解しようとし、のいずれかに分類できそうである）。IF等は直近の「論文注目度」であり、「流行」という短期の商業主義の観点では有用な指標であろうが、「本当の研究」の指標としては役に立たない。このような商業主義的雑誌に掲載された論文の引用文献にはその雑誌に掲載された文献が必要以上に引用され、論文で最も留意すべき「先行研究への敬意(respect to scientific originality)」の欠如がしばしばみられる。この傾向は、多額の研究予算をふんだんに使うことが出来る研究グループにしばしばみられるが、これは「研究資金に見合う研究成果」を「評判・うわさ」で担保しようとしている行為と考えれば納得できる。虚栄心を満足させるために（vanity-driven）いわゆる「一流誌に出版」し、また評

価に利用することは「研究力復活」への「国税」の使い方としては効果が少ないばかりか、逆に研究モラルの低下を進め（例えば、論文記述を歪め「痛々しいほどに」研究上司に忖度する等）、将来を担う人材の育成には役に立たない。多額の研究費の配分を任務とするfunding agencyには「評判」と同時に「国内の新しい芽」への細かい配慮を期待したい。

現状を直ちに多少なりとも克服するためには、まず「評価」する立場にある研究者が、それぞれの研究成果を理解し適切に対応する必要がある。場合によっては個人単独では内容の理解が適切にできないことはしばしば起こる。その際には、個人ではなく、複数の専門家同士の率直な意見交換が可能な「評価パネル」の利用が有効であろう。このような「謙虚な意見交換」の場は経験豊かな専門家にとっても大変貴重であることを痛感する機会がしばしばある。責任を持つ世代が次の世代を思い具体的な行動を取るべき状況にある。

---

ふくやま・ひでとし  
 専門：物性物理学（理論）  
 経歴：1970年理学博士（東京大学）、Harvard 大学、ベル研究所、東北大学理学部・金研、東京大学物性研究所・理学部、を経て2006年より東京理科大学。東京大学名誉教授、日本物理学会名誉会員。

---